

「キリストの支配を求めて」

(詩篇20・1～9)

一、祭司のことば

1節をご覧ください。〈苦難の日に主があなたにお答えになりますように。ヤコブの神の御名が あなたを高く上げますように。〉とあります。「あなた」という呼びかけは、5節まで続きます。

「あなた」は、王を指しています。すなわち、ダビデの子孫であって王に即位した者です。では、王に向かって「あなた」と呼びかけたのはだれなのでしょう。祭司たちでした。神はレビ族のAaronとその子孫を祭司に定め、主の用に当たらせました。一方で、レビ族には幕屋の設営等の一切が任せられました。そして神の御意思は祭司を通して語られ、また祭司によって祝福されるというのがイスラエルの伝統になりました。祭司は人々を祝福しました。律法を教ええました。特別な病とされたツアラアトであるか否かの判定も行いました。そのことを思いますなら、神の代理者として油注がれた王を祝福するのは祭司しかない、と言うことが分かります。そういうわけで、1節から5節までを、新しく王に即位した王に祭司が語ったことばとして見てまいります。2節をご覧ください。〈主が聖所からあなた

に助けを送り シオンからあなたを支えられますように。〉とあります。聖所は、神が御自身を現される場所として、モーセに命じて造らせた幕屋の中にありました。幕屋の中には契約の箱が安置されていました。ダビデの時代になると、ダビデの町と言われたシオンに、契約の箱を運び入れました。ダビデの子ソロモンはシオンに神殿を建築し、聖所の中に契約の箱を安置しました。2節の意味が見えてきたと思います。

続いて3節です。〈あなたの穀物のささげ物をすべて心に留め あなたの全焼のささげ物を 受け入れてくださいますように。〉との祝福のことばが語られています。ささげ物が受け入れられるとは、自分ないしは自分たちが神に受け入れられたという意味合いになります。「私が神に受け入れられている」と知るの、神の祝福です。こうして王を祝福することばが5節まで続きます。

二、王のことば

6節に入ります。6節はだれが語ったことばであるのか、はっきり分かりません。確証はないのですが、新しく即位した王として捉えると、分かりやすいです。〈公私は知る。主が 主に油注がれた者を救ってくださいることを。右の御手の救いの御力をもって 聖なる天から その者に答えてくださること

を。〉と語っています。神の代理者として立てられた王は、祭司の祝福のことばによって、確信を得ています。神は人を用いられます。神は祭司を介さなくとも、神の代理者たる王を祝福し、守ることはできます。ですが、人を介して事を行われるのが、聖書が指し示す神です。そのことは、逆も言えまして、隣人に対して語ることに、行うことが、そのまま聖なる神に対して語っていること、行っている業です。

三、「私たち」のことば

続いて、7節、8節を見てまいります。〈ある者は戦車を ある者は馬を求め。しかし私たちは 私たちの神 主の御名を呼び求める。彼らは膝をつき倒れた。しかし私たちは まっすぐに立ち上がった。〉こちらは、だれが語ったことばなのでしょう。7節、8節になると、〈私たち〉という一人称複数になっています。〈私たち〉とは、だれなのでしょう。そこに居合わせたイスラエルの会衆と捉えるのが適切かと思えます。

戦車とか馬は、当時の人々にとって戦力でした。今日で言うなら、軍事力です。それを増強することによって、周辺の国々を従わせて行くことができる、と考えることです。このような知恵は、昔も今も変わりません。神を信じる者は、無防備でただお祈りだけしていた

ら良いという意味ではありませんが、私たちが知るべきは、人間が考えたようにはならないということです。なぜでしょうか。最終的な支配者である神がおられるからです。もちろん神は、私たちが望むとおり動いてくださり、弱い者を守ってくださいる、ということもないではありません。だから、祈って信仰を働かせるのです。その場合の信仰とは、自分の願望を反映させるような願いではなく、罪人である私たちをもキリストにあって受け入れてくださる神を信じることです。

9節を見てまいります。〈主よ 王をお救いください。私たちが呼ぶときに答えてください。〉とあります。9節も〈私たちが〉となっていますので、7節、8節の続きと捉えるなら、イスラエルの会衆の祈りです。イスラエルの会衆が主なる神に向かい、油注がれた王を、別の表現で言いますなら、キリストを救ってくださいと祈ることです。「キリストのために祈る」とは、聞き慣れない言葉かと思われ。ですが、王なるキリストが自由に働かれるように祈ること、キリストによってこの世の悪の力が押さえられ、キリストの勝利が現れるように祈るの必要なことです。

きょうは詩篇20篇から主の語りかけを聴きました。王なるキリストの支配を求めて、祈り続けようではありませんか。